

第 23 回 灼熱のドバイへ 総領事に赴任

2013 年 07 月 16 日

(約 5800 字)

塩尻宏

(中東調査会参与、元駐リビア日本国特命全権大使)

《在ドバイ総領事に発令》

私が NIS 室に勤務していた頃は、「シルクロード外交」が活発に展開されていたので、新独立国家室長としての私は、前号で書きましたキルギスでの日本人拉致事件に対応すると同時に、その他の案件にも対応する必要がありました。要人往来も頻繁に行なわれており、私の在任中（1999.5～2001.3）の 1 年 10 ヶ月間に、担当国からはナザルバエフ・カザフスタン大統領（1999 年 12 月）を始め閣僚クラス以上の要人訪日約 20 件、日本からは中山太郎衆議院議員・自民党外交調査会長・元外相（当時）を団長とするコーカサス友好親善ミッション（1999.10.5～13）の派遣を始め NIS 諸国への要人訪問 7 件（延べ 10 名）、国際会議 9 回（東京 6 回、外国 3 回）などがありました。

様々な案件に対応して気を抜くまもない日々を過ごしていた私は、2000 年 11 月のある日、人事担当者から内々に「あなたを中東の中規模大使館の次席参事官に異動させる話が浮上しているので、そのつもりで……」との連絡を受けました。外務省では 1 つのポストに 3 年前後とどまるのが通常ですが、NIS 室長としての勤務がやっと 1 年半過ぎたところでした。それとなく背景事情を尋ねると、ある大使から名指しで要望があったようでした。

外務省のノン・キャリア人事の担当者は、同じノン・キャリアで管理職となった古参職員の中からキャリア組にも認められる者が企画官や調査官という肩書で務めます。当時の人事担当者は旧知の同僚の一人で、私とは NIS 室職員の人事案件で親しく相談する間柄でした。

事務引継ぎの都合もあると考えて、内々の含みで上司の欧亜局長にこの人事を報告したところ、局長は「NIS 室長を務めたあなたの前任者や前々任者は、その後は総領事となっているが、あなただけ中規模大使館の次席がオファーされるのはなぜなのか」と尋ねました。「人事の都合なのでしょう」と答えた私に対して、局長から「自分から人事課長に尋ねてみるので、この件はちょっと待って」と言われました。

局長との上記のやり取りがあった数日後、同じ人事担当者から私に呼び出しがあり、「あなたは何をしたのか。進めていた人事の予定をあちこちからの圧力で変更せざるを得なくなった」と苦情を言われました。私は「内々に上司の局長に報告しただけで、それ以上の

ことは何もしていない」と応答しました。その後、2001年の1月に入って「近く在ドバイ総領事に発令予定」との内示を受けました。

あとで聞いたところでは、欧亜局長と中近東アフリカ局長（いずれも当時）の双方から人事当局に申し入れがあったために、当初予定の人事計画が変更されたとのことでした。結局、私は2001年3月5日に在ドバイ総領事に発令されましたが、NIS室長としての勤務は1年10カ月でした。

《UAE とドバイ》

アラブ首長国連邦（United Arab Emirates：以下、UAE）は、アラビア半島東部のペルシア（アラビア）湾に面し、オマーン、サウジアラビア、カタールと国境を接する北海道（7.8万km²）よりやや広い約8.3万km²の面積に約8百万人（2011年789万人：世銀資料）の人口を有する国です。しかし、本来のUAE人は総人口の2割程度であると見られ、残りの8割はインド、パキスタンなど西アジア諸国やインドネシア、フィリピンなど東南アジア諸国を中心とした出稼ぎ外国人であると言われています。



図1：アラビア半島図【出典：Wikipedia、2013.6.23】

UAEは大統領制の連邦国家ですが、それぞれの首長国（アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマーン、ウム・アルカイワイン、ラス・アルハイマ、フジャイラ）は、アミール（Amir）と呼ばれる首長が統治する君主制の自治国家です。外交、軍事、通貨、郵便などは連邦政府の所管ですが、資源開発、教育、経済政策、治安維持（警察）、社会福祉、インフラ整備などは各首長国独自の政策に任されています。

UAE面積の約80%以上（6.7万km²）を占めるアブダビ（Abu Dhabi）首長国は、サウジアラビア、イラクなどと並ぶ世界の主要産油国の一つです。その生産量は300万BD以上（2011年332万BD：BP統計）で、日本が輸入する石油の約20%（サウジアラビアからは約30%）はアブダビ首長国から来ています（2010年度：資源エネルギー庁統計）。潤沢な石油収入に裏打ちされたアブダビ首長国は、UAEの連邦財政の9割（残り1割はドバイ首

長国)を負担しています。そのため、他の首長国と比べて圧倒的な存在感を有していて、その首都アブダビが連邦の首都であり、その首長が連邦大統領を務めています。

一方、人口は約 200 万人 (2012 年末推定 : Dubai Statistics Center, Feb, 2013) のドバイ首長国は、世界的にも有数な物流・金融センターとして、UAE 内でアブダビ首長国に次ぐ存在感を誇示し、代々その首長は連邦副大統領兼首相を務めています。

ご存知の方も多いと思いますが、ドバイは、古くから湾岸地域における物流の中心地でしたが、特に 1970 年代後半から急速に発展し、現在では東南アジアのシンガポールに比肩する中東・アフリカ地域における物流・金融のセンターとなっています。そのため、現地に進出している日本企業数 (約 200 社)、日本人在留者数 (約 3 千人) は、中東・アフリカ地域で最大となっています。

《在 UAE 大使館と在ドバイ総領事館の役割》

中東・北アフリカ地域には 21 の独立国がありますが、そのうちイラン (ペルシア語)、アフガニスタン (ダリー語)、イスラエル (ヘブライ語)、トルコ (トルコ語) 以外の 17 か国はアラビア語を母国語とするアラブ諸国です。これら諸国の全てには日本国大使館が置かれており、その他にトルコのイスタンブール、サウジアラビアのジェッダ、UAE のドバイには日本国総領事館が置かれています。

UAE の首都アブダビには在 UAE 日本国大使館がありますが、在ドバイ日本国総領事館はアブダビから北東に 150 km ほど離れた UAE 最大の都市ドバイにあります。在ドバイ日本国総領事館は、アブダビにある在 UAE 日本国大使館の領事部と勘違いされたことがありますが、法律上はそれぞれ独立した組織です。大使は国を代表して相手国の首都に駐在しますが、総領事は外務省組織法で定められた管轄区域内で日本人の保護や日本の権益を守るための業務 (領事業務) を行います。

公邸に居住する在外公館長には料理人を雇うことが認められています。その給与の一部は外務省から補填されますが、その額は限られていますので、高額な給与を期待する日本人のベテラン料理人を雇うことは困難な実情です。中東地域の小規模公館では日本料理の心得があるタイ人などを雇う例が少なくありません。私のドバイ在勤中の料理人はフランス料理の心得がある日本人の若者でした。彼は良くやってはくれましたが、料理人としての経験が浅いために料理の出来具合が安定しないのが難点でした。

《灼熱の砂上都市》

私が日本国総領事としてドバイに着任したのは 12 年前の 2001 年 4 月のことでした。到着して最初に感じたことは、気候がやたらに暑いことと空港や街中にはインド系や東南アジア系と思われる容貌の人々がひしめくように動いていることでした。

現在のドバイには世界一高い建物であるブルジュ・ハリファ (Burj Khalifa : 尖塔高 828m、160 階建て、2010 年竣工) がありますが、私が着任した時には市内の海岸沿いに当時としては世界一の高層ホテル、ブルジュ・アルアラブ (Burj al-Arab : 321m、70 階

建て、1999年竣工)が営業を開始して間もない頃でした。それ以前のドバイではせいぜい10数階程度の建物が殆どで、日本国総領事館や米国総領事館があるドバイ・ワールドトレード・センター (Dubai World Trade Center : 39階建て、1978年建設) が、UAEのみならず湾岸地域で唯一の超高層建築 (skyscraper) でした。

最低でも1泊1,000ドル、最上階のスイート・ルームは1泊5,000ドルもする7つ星レベルと言われていたブルジュ・アルアラブ・ホテルは、長期滞在する周辺産油国の王族などで一般の予約が困難なほどの盛況にあるとして話題を呼んでいました。その後、陸上では巨大なショッピング・モールや高級ホテルが次々と建設され、沖合には2001年6月から別荘と高級ホテル、リゾート施設を備えたナツメヤシの形をした巨大な人工島パーム・アイランド (Palm Jumeirah : 2006年竣工) の埋め立て作業が行われていました。その後、さらに2つの同様な巨大人工島 (Palm Jebel Ali、Palm Deira) が建設中とのことです。

当時100万人程度と言われていたドバイの人口のうち本来のドバイ人は15~20%ほどで、残りの80~85%は出稼ぎ外国人であると聞かされました。現在でも基本的には変わっていないと思われませんが、当時から外国系の企業はもとより、ドバイ政府機関の事務所でも中堅幹部の大多数は外国人でした。ドバイ資本のエミレーツ航空の会長 (Chairman & CFO) はドバイ首長家のメンバーであるシェイフ・アフマド (H. H. Sheikh Ahmad bin Saeed) ですが、同社の社長 (President & CEO : Mr. Tim Clark) や副会長 (Executive Vice Chairman : Mr. Maurice Flanagan) は英国人です。現在でも最高幹部はドバイ人ですが、高級幹部まではドバイ人と外国人が混在して働いているのは珍しくありません。

ドバイ気象局の資料によれば、同地の気候は亜熱帯の砂漠気候で、日々の最高気温は夏場 (5~8月) で45℃以上 (8月には48.0℃)、冬場 (12~2月) でも31℃となっていますが、夏場には50℃を越えることも珍しくありません。その上、年間を通じて100%近い湿度がありますので、体感温度はまさに酷暑です。念のために気温を測ろうとしたことがありますが、日本から持参した寒暖計は45℃程度までしか測れないために役に立ちませんでした。同じく、日本から持ち込んだ不快指数計の針も振り切れたことを覚えています。

日本では最高気温に応じて夏日 (25℃以上)、真夏日 (30℃以上)、猛暑日 (35℃以上) とされ、不快指数が85以上は「暑くてたまらない」とそうですが、若い頃にスーダンのハルトゥームで50℃を体験したことがある私としても、あのドバイの気候は何と表現して良いか分からないほど強烈でした。私がドバイに在勤していた当時は、気温が50℃を越えると屋外労働が禁止されると聞いていましたが、公式の気温記録が50℃を越えたことはありませんでした。現在のUAEでは、夏季 (6月15日~9月15日) の日中 (12:30~15:00) には屋外労働が禁止されているようです。

《在外公館長の仕事は挨拶から》

在ドバイ総領事に発令された私は、前例に倣って、赴任前に省内や関係省庁の幹部職員、与野党幹部、主要関係企業幹部などへの挨拶回りをしながら、その合間を縫って省内関係

部局から現地事情や懸案事項などについての説明を受けました。同時に、海外への転勤でするので、自分の身の回り品を整えて発送する準備をも行う必要がありましたので、出発までの1カ月は瞬く間に過ぎました。当時は日本からドバイへの直行便はありませんでしたので、香港経由のキャセイ・パシフィック便で2001年4月8日に現地に着任しました。

在外公館長として着任すると、仕事を始める前に関係者に着任したことを正式に通報する必要があります。ドバイ首長国の首都ドバイにある在ドバイ日本国総領事館は、アブダビ首長国以外の6首長国を管轄しています。まずはドバイ首長を始め管轄区域内の各首長への表敬訪問を申し入れると共に、ドバイ政府要人や現地の有力実業家、ドバイに駐在する各国総領事、現地に駐在する日本企業の代表者などを順次訪問して着任の挨拶をしました。

上述のとおり、各首長国は国防、通貨、郵便などの連邦共通事項を除いて首長が専制的に統治する半独立国です。大名がそれぞれの藩を専制的に治めていた江戸時代の日本の幕藩体制を想像して頂ければ分かり易いと思います。シャルジャのように全面的に禁酒としている首長国もありますが、外国人の飲酒を認めている首長国ではビールやワイン、ウィスキーなどアルコール飲料を販売する店舗もあります。UAE内の異動は自由ですので、出稼ぎ外国人の中には週末にその首長国に出かけてアルコール飲料を購入する者もいます。ただし、帰り道にシャルジャ首長国内でそれが見つかれば処罰されることになります。



**アジュマーン首長(H.H. Sheikh Humaid bin Rashid Al-Nuaimi)表敬訪問
(アジュマーン首長府 2001.5.6)**

それぞれの首長家のメンバーはシェイフ (Sheikh) の尊称を持ち、殿下 (His Highness) の敬称で呼ばれます。ドバイではハムダーン副首長 (H. H. Sheikh Hamdan bin Rashid) への表敬訪問が手配され、その他の5首長国では首長自身に直接表敬しました。日本国総領事として訪問した私は、いずれの首長・副首長からも極めて好意的に応接されました。私からは「このたび日本の総領事として着任しました。日本と貴首長国との良好な関係が一層増進されることを希望しています」との趣旨をアラビア語で述べると、たいていの場合には、先方から「アラビア語はどこで習ったのか？ ムスリム(イスラーム教徒)なのか？」と質問され、「機会があれば、日本を訪問してみたいと思っている」との応答がありました。

アジュマーン首長国の首長とは特に打ち解けた雰囲気です。予定の時間を大幅に越えて会話が弾み、先方から冗談めいて「ムスリムになってこちらに住むつもりであれば、新しい花嫁を紹介しよう」と提案されたのを懐かしく思い出します。また、訪日経験のある首長は、当時の訪問先での思い出話を懐かしそうに話してくれました。各首長との交流は心温まる思い出となっています。